

第77回 文化財展

文化財この一年

主催

仙台市教育委員会

期日

6月13日  火 ▶ 8月20日  日

ごあいさつ

仙台市内には、国宝や重要文化財を含む約300件もの指定・登録文化財や、約780ヶ所の遺跡があります。これらは私たちの祖先が残した貴重な文化遺産であるとともに仙台の歴史や文化を後世に伝える大切な資料でもあります。

今回の展示では、令和4年度に実施した市内遺跡における主な発掘調査の成果を写真パネルと出土遺物で紹介します。

また、仙台市内の文化財としておよそ7年ぶりに県の文化財に指定された「旧歩兵第四連隊兵舎（現在の仙台市歴史民俗資料館）」や、日本遺産についても紹介します。

これらの展示を通じて市民の皆様に仙台の歴史や文化の一端を感じていただき、文化財保護へのご協力をいただければ幸いです。

大量に出土した縄文土器の破片 (上野遺跡)

調査場所 仙台市太白区富田字上野中

調査期間 令和5年1月19日～1月24日

調査面積 約12m²

上野遺跡は、地下鉄南北線富沢駅の西約3.5kmに位置しています。遺跡の面積は約30ヘクタール(東京ドーム約6.4個分)に及びます。これまで仙台市教育委員会により、複数回の発掘調査が行われています。

令和4年度の発掘調査は、上野遺跡の南部の地点で行われました。地表から約40～50cm下の地層からは、大量の縄文土器の破片が出土しました。その中には今回展示しているような完全な形に近い状態のものもありました。渦巻き文様や口縁部に立体的な装飾があるものが多数出土しており、文様の特徴から縄文時代中期の土器であることが推定されます。これらの土器は耕作等により掘り起こされたものと考えられます。また地表から約1m下では、竪穴住居跡と推定される遺構も部分的に確認されました。



--- 住居跡

発見された竪穴住居跡



出土した完全な形に近い土器

弥生時代の遺物を大量に発見 (今市東遺跡)

調査場所 仙台市宮城野区岩切字今市東の一部

調査期間 令和4年5月23日～8月9日

調査面積 約1,101㎡(1区1,057㎡、2区44㎡)

弥生時代中期の遺物を多く含む遺物包含層とその下から土坑が12基発見されました。遺物包含層および土坑からは、弥生土器と石器が多量に出土しました。これらは、洪水等の自然災害で周辺から流されて運ばれてきた可能性が考えられます。

今市東遺跡からは、水田の畔(畦畔)が発見されませんでした。そのことから、今市東遺跡には水田が広がっていなかったと考えられ、一方で、住居の痕跡は見つからなかったものの、人為的に掘られたと考えられる複数の土坑が発見されています。これらのことから、弥生時代の人々が近くで生活していたことが考えられ、今市東遺跡は、七北田川周辺に弥生時代の集落が存在していた可能性を示唆しています。



土器などを大量に含む遺物包含層



弥生土器(蓋)出土状況

紐解きたい歴史の宝庫 (郡山遺跡)

調査場所 仙台市太白区郡山

調査期間 令和4年6月20日～9月30日(第320次) 調査面積 約230㎡(1区約140㎡ 2区約90㎡)

第320次調査では土師器、須恵器、瓦、礫石器、金属製品が出土しました。中でも注目して頂きたいのは、下の写真の須恵器です。これは焼き物の硯すずりの一部で、上から見ると円い形まるをしているので「円面硯」と呼ばれ、官衙に勤めていた役人などが書類を作成する際に使ったと考えられています。これまでも郡山遺跡では円面硯が出土していますが、赤い顔料が付着したものは初めての発見です。一体、何を意味しているのでしょうか。



須恵器(円面硯)

発見？陸奥国分寺跡の北辺を求めて

(陸奥国分寺跡)

調査場所 仙台市若林区木ノ下2丁目

調査期間 令和4年10月11日～12月6日

調査面積 約170㎡

陸奥国分寺跡の北辺を明らかにすることを目的として、遺跡の北部で発掘調査を行いました。調査では東西方向の溝跡が検出されました。この溝跡は南大門（現在の仁王門）から北に約272mの場所にあたります。溝跡の規模は幅1.6m、深さ80cmで、南辺を区画する溝跡と規模や形状が類似していることから北辺の区画溝である可能性があります。このほか古代の掘立柱建物や、柱を据えた柱穴が複数見つかり、古代のお寺と関連した施設が周辺にあった可能性があります。



陸奥国分寺跡の北辺の可能性のある溝跡（東から）

江戸時代の生活用品現る！

(北目城跡)

調査場所 仙台市太白区東郡山

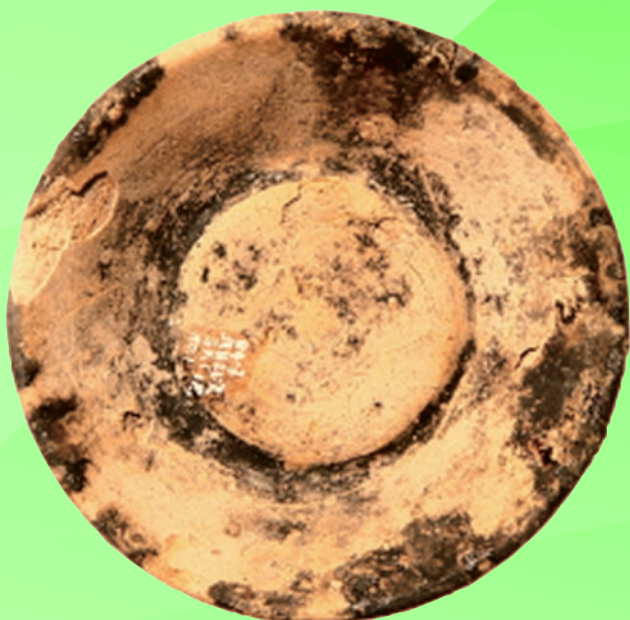
調査期間 令和4年5月23日～5月24日

調査面積 約9m²

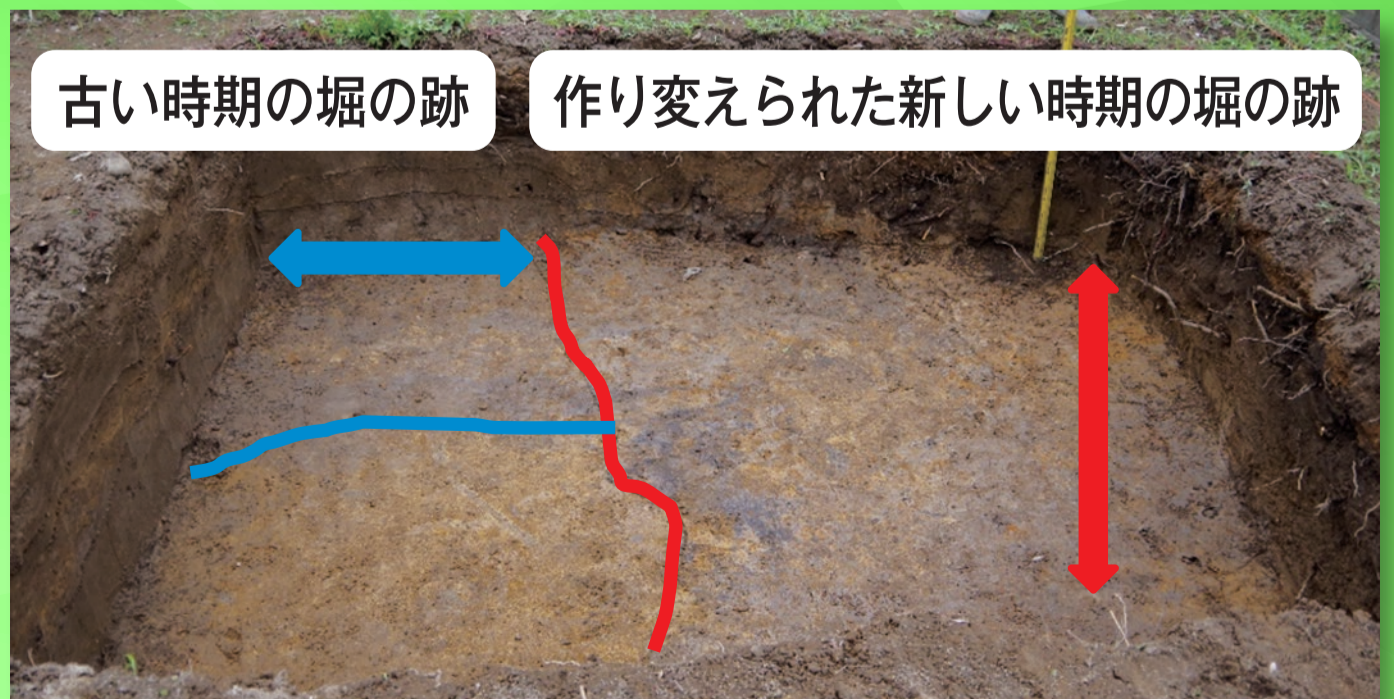
今回の調査地点は、JR長町駅の南東1.5km、国道4号線の鹿の又交差点付近に位置しています。

令和4年度の調査では、過去の調査で検出された堀跡の続きを確認されました。また、近世に使用されていた陶磁器や灯明皿などの土師質土器が出土しました。堀跡から出土した遺物は色や模様などから17世紀～19世紀頃の物と推定されます。

灯明皿は、皿に油を入れ、麻や綿などで作ったひもを浸して火をつけ、照明として使われました。黒くなっている部分は、油を燃やした際のススや油脂などが付着したものです。今回完形に近い形で出土しており、江戸時代の人々が使用した痕跡をはっきりと見ることができます。



灯明皿（江戸時代）



古い時期の堀の跡

作り変えられた新しい時期の堀の跡

北目城跡第21次調査区

江戸時代・仙台水運・ど真ん中！ (蒲生御蔵跡)

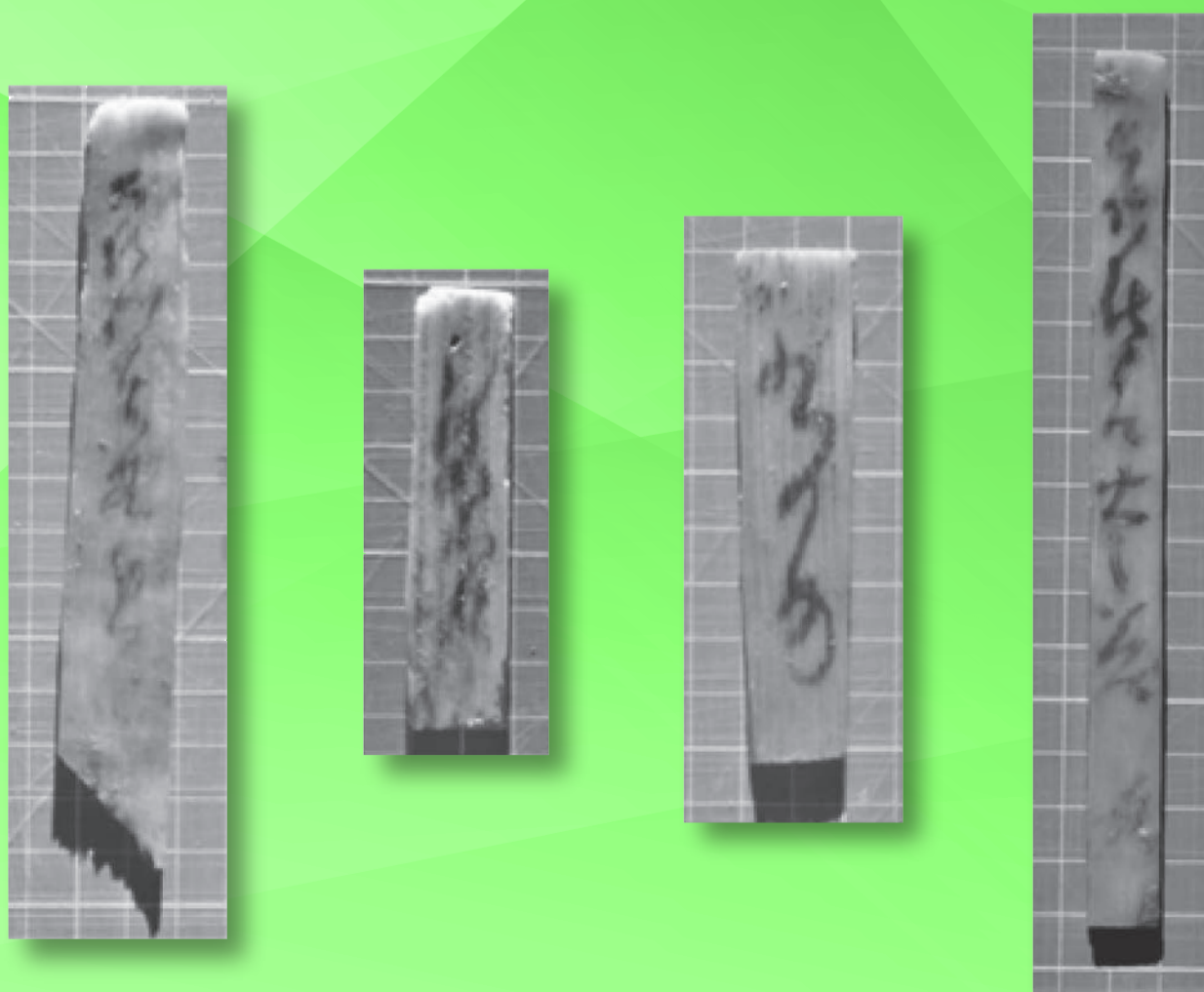
調査場所 仙台市宮城野区蒲生

調査期間 令和4年5月25日(水)～12月27日

調査面積 3,389m²

今回の調査では、建物跡7棟、堀跡2条、井戸跡1基、土坑15基が検出されました。見つかった土坑の中から110点ほどの木簡が出土しました。この中には文字が書かれているものが約半分くらいあります。

出土した木簡には細い短冊形の木簡、下部がとがり、品物のくくり紐に直接さすことができる木簡、上部に丸い小さな穴があり、紐をつけられるようになった木簡などがあります。内容や形状から荷札木簡とみられ、運搬物資に付けられていたと考えられます。今回出土した木簡の内容はこれから解読します。今後、御蔵場での流通に関わる「もの」、「人」、「産地」などが明らかになるかもしれません。



文字が書かれた木簡 (赤外線写真, 現在判読中)

再評価された市内の建造物

(旧歩兵第四連隊兵舎と陸奥国分寺鐘楼堂)

「旧歩兵第四連隊兵舎」は、榴岡公園に所在する、仙台市歴史民俗資料館として活用されている建物です。県内に現存する擬洋風建築では最も古く、規模も最大であるほか、全国的に見ても兵舎の現存例は少ないことから、大変貴重と評価され、令和5年3月に宮城県指定文化財に指定されました。

「陸奥国分寺鐘楼堂」は、若林区木ノ下に所在する、袴腰付き鐘楼です。市内現存最古の建物として貴重であるとともに、陸奥国分寺の中世からの歴史を今に伝える重要な建物と評価され、令和5年3月に仙台市指定文化財に指定されました。



陸奥国分寺鐘楼堂

にほんいさん 日本遺産

まさむねはぐくだてぶんか 政宗が育んだ“伊達”な文化

「日本遺産」とは、地域の歴史的魅力を通じて日本の文化・伝統を語るストーリー(物語)を文化庁が認定する制度です。その中で、仙台市・多賀城市・塩竈市・松島町にある51の構成文化財をもとに、平成28(2016)年度に認定されたストーリーが「政宗が育んだ“伊達”な文化」となります。

仙台藩の初代藩主・伊達政宗が仙台の地に花開かせた新しい“伊達”な文化を基礎に、のちの藩主や武士、庶民に広がり、熟成されていった貴重な建造物、遺跡、絵画、工芸品、民俗芸能などから構成されています。



構成文化財の一つである国宝・大崎八幡宮